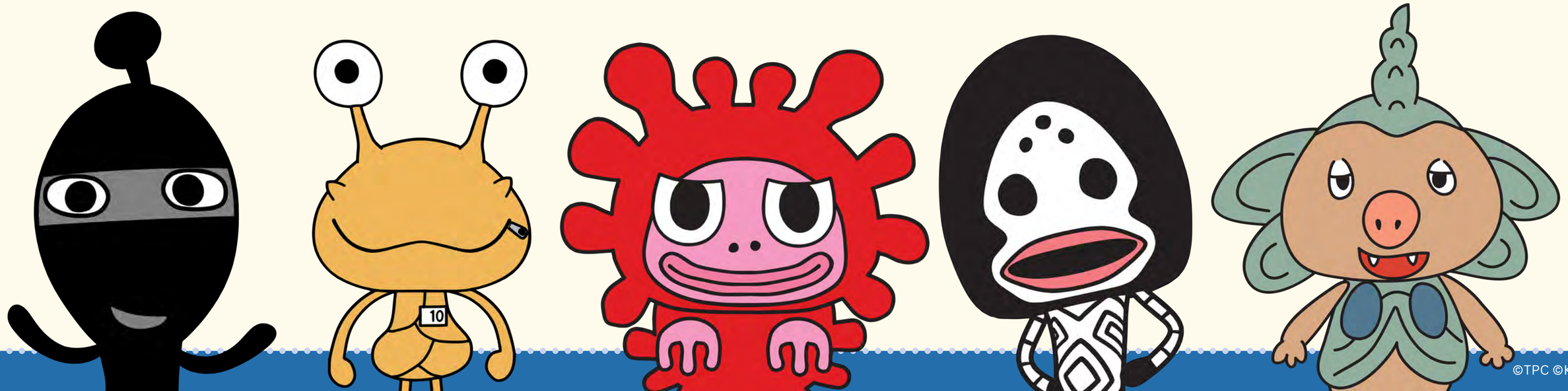
イギリスと日本の里親制度の比較研究
ー当事者の視点から見た日本制度の課題と改善提案-

２０２５年度　日本財団助成事業

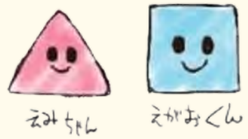
NPO法人里親子支援機関えがお　ごちゃまぜフォスターケアラー・ラボ

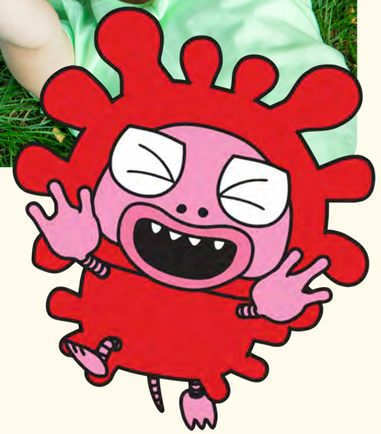
Supported by 日本財団 THE NIPPON FOUNDATION



©TPC ©KSW

こんにちは、
「えがお」です！
「ごちゃラボ」です！



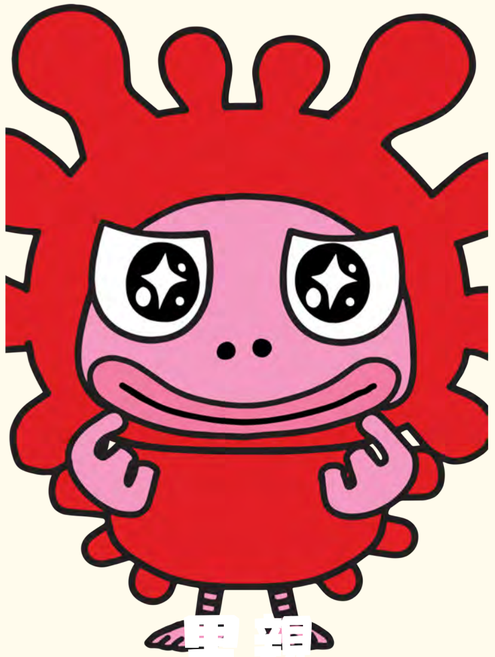


NPO法人里親子支援機関えがお

ごちゃまぜフォスターケアラー・ラボ（ごちゃラボ）

©TPC ©KSW

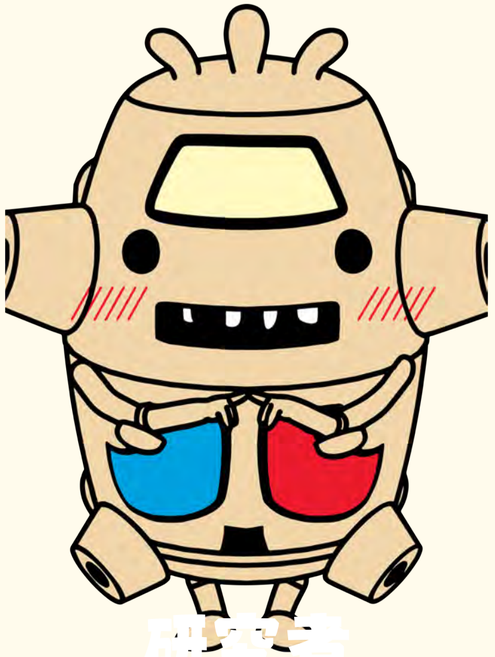
ごちゃラボのメンバー



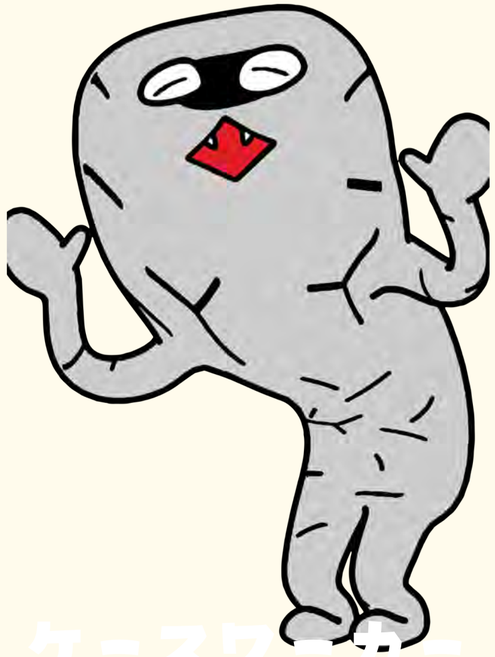
里親

中心的メンバー

心理士



研究者



ケースワーカー

代表：牧野博子・井上直美・代表代理：緒方笑子（全員里親）

©TPC ©KSW

はじめに

　2024年夏スキルストゥフォスター（STF）のトレーナー養成講座に参加した私たちは、イギリス人講師二人からイギリスの里親制度、子どもに対するまなざし、里親の地位を、日本と比較しながらをお聞きすることになったのです。その違いの大きさは衝撃的でした。

　そしてその大きな気づきを何とか仲間に伝えたい、ひいては子どもたちに還元したいと強く思ったのです。

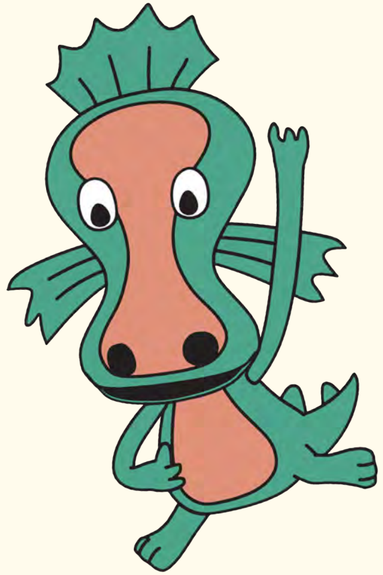
　まず、学び、そして日本との違いを確認し、日本に適した形で実践できないかと立ち上げたのが、**ごちゃラボ**です。

ごちゃまぜフォスターケアラー・ラボ
（通称：ごちゃラボ）

牧野博子　井上直美

©TPC ©KSW

ラボの目的



1 イギリスの里親制度を知ろう

イギリスの里親制度に詳しい方のお話を研修で聞く

イギリスの里親会との交流

2 イギリスと日本の里親制度の比較

毎月のオンラインでイギリスとの比較を話し合う

里親会交流からの違いを知る

3 里親や実子などの実体験から日本に必要な制度提案

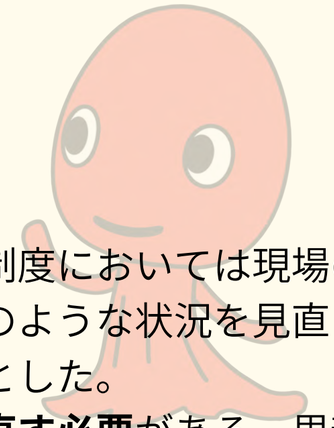
イギリスの実子研修実施から分析し、日本のかたちへ落とし込む

教科書署名運動を通じて広く社会的養護を啓発する

えがお・ごちゃラボ

©TPC ©KSW

概　要



本事業は、里親の実践的な経験と声を基盤として、**日本の里親制度の改善を目指す**ものである。従来、里親制度においては現場の課題が指摘されながらも、それらが具体的な改善へと十分に結びついてこなかった現状がある。本事業では、そのような状況を見直し、里親の声を出発点として「課題の共有」にとどまらず、「改善へと導く取り組み」へと発展させることを目的とした。

まず、里親委託は社会的養護の一形態であるという前提に立ち、**「家庭養育」に専門性を求めない風潮を見直す必要**がある。里親には子どもの養育に関する知識や対応力など一定の専門性が求められることを明確にし、それが社会的に理解され、尊重される環境の構築を目指す。

また、「家庭養育優先原理」に基づき、里親委託は長期化を前提とするものではなく、適切な期間の中で子どもの最善の利益を実現するものであるという認識の共有が重要である。短期間での適切な関わりにより、子どもへの心理的負担を最小限に抑えることの必要性について、里親および支援機関双方の理解を促進する。

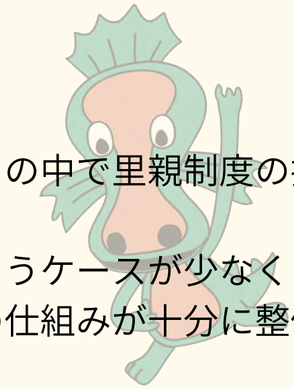
さらに、本事業では**イギリスの里親制度に着目**し、現地の里親会との交流を通じて得られた知見をもとに、日本の制度への示唆を得ることを試みた。海外の先進的な取り組みを参照しつつ、日本の実情に応じた形で制度改善に活かすことを目指している。
加えて、里親のスキル向上を重要な柱とし、里親として求められる役割や実践について、すべての里親が学び続ける環境づくりを推進した。特に、社会的養護のもとで育った子どもたち（ケアリーバー）が将来的に社会的弱者とならないための支援の在り方について、「教科書」として体系化していく取り組みの必要性を提起している。

これらの取り組みを通じて、社会的養護に対する社会全体の関心を高めるとともに、**社会的養護を経験した子どもたちが困難を乗り越えた存在として尊重される社会の実現を目指すものである。**

えがお・ごちゃラボ

©TPC ©KSW

背　景



近年、日本の社会的養護においては「家庭養育優先原則」に基づき、施設養育から家庭的養育への移行が進められている。その中で里親制度の拡充が重要な政策課題として位置づけられているが、実際の運用においては多くの課題が指摘されている。以下のようにまとめた。

・**養子縁組が成立した後**の支援体制については、行政や支援機関からの関わりが大きく減少し、支援サービスが途絶えてしまうケースが少なくない。養子縁組後も家族関係の形成や子どもの成長過程において様々な課題が生じる可能性があるにもかかわらず、継続的な支援の仕組みが十分に整備されていないことは大きな課題である。

・里親委託の過程における子どもに関する**情報開示の不足**も指摘されている。里親が子どもの背景や特性を十分に理解しないまま養育を開始することは、養育上の困難を生じさせる要因となり得る。また、適切な支援や対応を行うためにも、必要な情報が適切に共有される体制が求められている。

・**里親と支援機関との協働**のあり方にも課題がある。里親が支援者と協力しながら養育の専門性を高めていく環境が十分に整っているとは言い難く、里親が孤立した状況で養育を担うケースも見られる。社会的養護としての里親委託を考える上では、里親と専門職が協働しながら子どもの養育を支える体制の構築が重要である。

・**子どもの家庭再統合**に関する支援体制も十分とは言えない。実親に対する家庭再統合プログラムが体系的に整備されていないことにより、実親が子どもを再び家庭に迎えるための準備や支援を受ける機会が限られている。その結果、本来目標とされるべき家庭再統合が具体的な目標として設定されないまま養育が継続されるケースも存在する。

・里親家庭の**実子に対する支援**も十分に検討されていない領域である。里子を迎えることは家族全体に影響を及ぼす出来事であり、実子も生活環境の変化や感情的な葛藤を経験する可能性がある。しかし、日本では実子を対象とした研修や支援プログラムはほとんど整備されておらず、実子の視点からの支援は限定的である。

これらの課題を踏まえると、日本の里親制度においては、里親・里子のみならず、実親、実子、養子縁組後の家族を含めた包括的な支援体制の整備が求められている。本研究では、これらの課題を背景として、日本の里親制度の現状を整理するとともに、海外の取り組み、とりわけイギリスの里親制度からの示唆を踏まえながら、制度改善の方向性について検討することを目的とする。

えがお・ごちゃラボ

©TPC ©KSW

すごいところ

里親が中心

45名メンバー中
２３名が里親

日本初

・里親家庭の実子向け研修
・義務教育教科書に社会的養護「里親制度」の署名活動
・イギリス里親会との交流

チームになっている

2025年夏立ち上がったごちゃラボは当初24名。2026年3月31日時点で45名に増えました。
心理士、研究者、NPO職員、児相職員　里親支援機関職員　里親

えがお・ごちゃラボ

©TPC ©KSW

だいじな　欲張りな事業

事業１
セミナー

春季里親研修

聞いてみよう里親制度　外国との違いを知ろう（大阪市　堺市　大阪府　合同）

事業２
調査研究
技術開発

研修者等を交えイギリスと日本の里親制度を深堀しよう
毎月一回MTG

事業3
セミナー

里親家庭の実子向け研修
イギリスの認定前研修を参考に
（実際には登録後の里親家庭の子を対象）

事業４
セミナー

イギリスの里親会とオンラインで交流

事業５
資料等作成・配布

教科書掲載運動

えがお・ごちゃラボ

©TPC ©KSW

主な活動実績

２０２４年8月～２０２６年3月

２４年８月	ごちゃラボ結成　　２４名
１０月	日本財団初申請
２５年４月	春季里親研修　イギリス里親制度
７月	里親家庭　実子向け研修　大阪２回
９月	イギリス里親会の件でオンラインMTG
９月	教科書掲載運動オンライン署名スタート
１０月	全国里親会で署名活動紹介
１１月	ジャスピカン学術集会で発表
２６年１月	里親家庭　実子向け研修　名古屋１回
2月	大坂弁護士会人権フェスタ

※ピンク字は助成事業以外

毎月１回

- 代表者打合せ
- 実施イベント予定の打ち合わせ
- **オンライン　MTG**
- 報告書等作成

受賞候補・取材・発表

- 大阪弁護士会　人権賞　最終候補
- 全国里親会　里親だより　147号
- ヤフーニュース　近日中
- 朝日新聞　連載予定
- ジャスピカン　学術集会　展示

事業１ セミナー

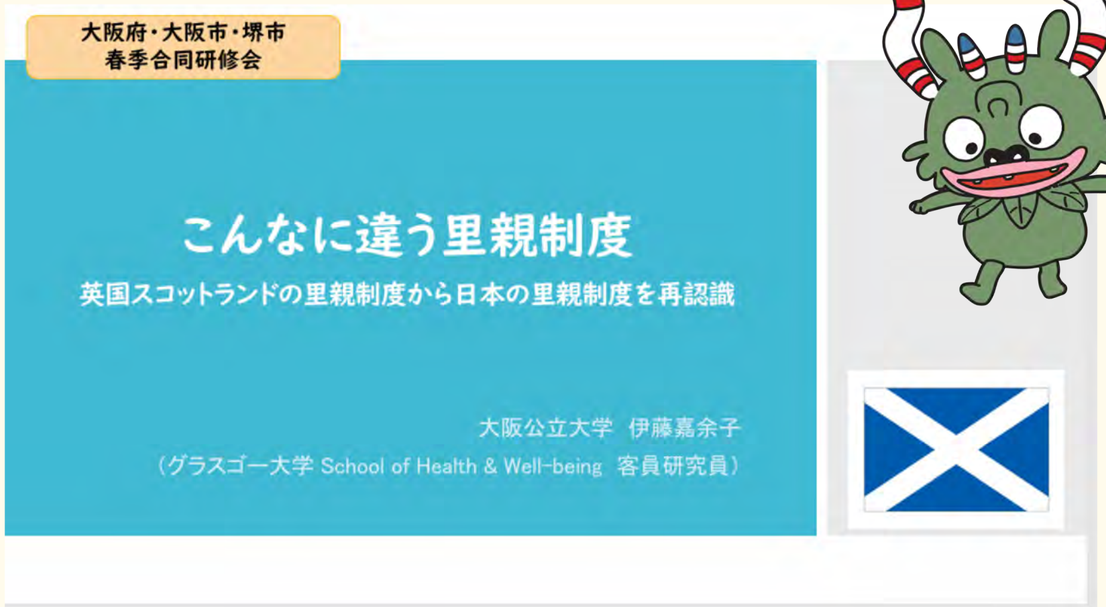
4月20日（日）春季里親研修会

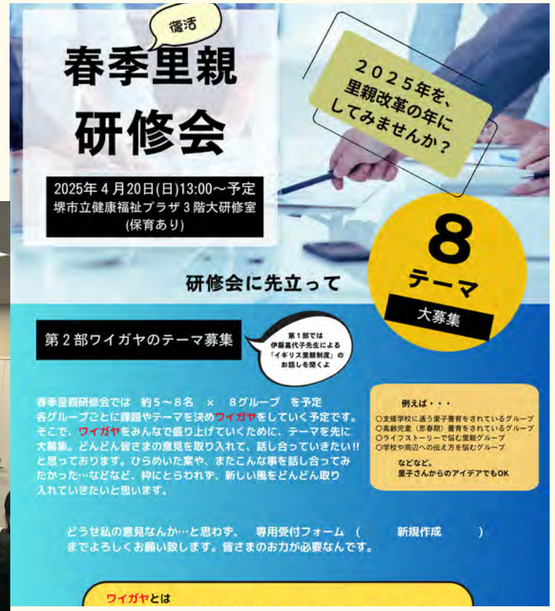
参加６０名スタッフ保育等20名

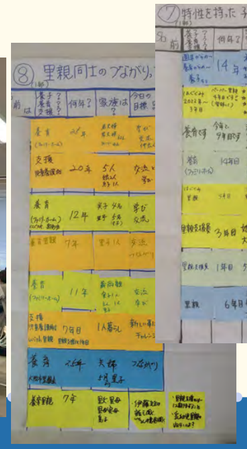
ミーティングを重ね、念願の5年ぶりの開催ができました。参加者60名（東京・名古屋からも）、保育をご利用いただいたお子様15名、そして事務・保育スタッフを合わせた総勢80名超が集い、一緒になって大変有意義な時間を共有することができました。

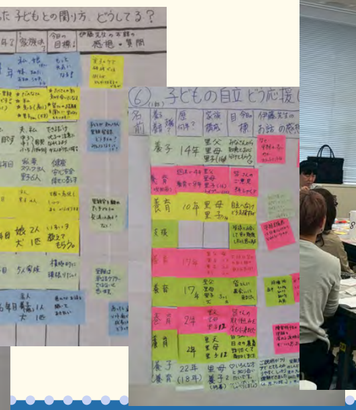
特に、大阪公立大学の伊藤嘉余子教授をお招きし、「こんなに違う里親制度～イギリス里親制度を知って日本の里親制度を再認識しよう～」というテーマでのご講演は、子どもたちが笑顔で成長できる環境づくりについて、貴重な学びの機会となりました。

その後のワイガヤ・テーマ討論や８グループ発表では、皆様から多くの建設的なご意見をいただき、日本の里親制度の発展に向けて新たな視点を得ることができました。









©TPC ©KSW

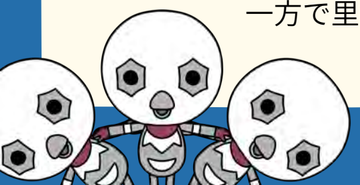
事業１
イギリスと日本の比較
スコットランド

スコットランド	日本
虐待など事実認定は**裁判所**が行う	虐待などの事実認定は**児童相談所**が行う
原則１０歳までは施設ケアしない	日本では施設ケアが中心
地域から離さないケア	近年は地域から離さない方向
Kinsip careが４０％ （親族・近所・友人）	親族里親はあるが少ない 約５％（大阪2%）
実子の同意がないと里親になれない・登録前研修がある	実子の同意は重要視されていない 研修は皆無

イギリスも日本も実子への支援はまだまだ課題

一時保護所がないので里親が担う	一時保護所があり満杯のため里親も
里親支援機関を里親自身で自由選択	居住地で里親支援機関が決まる
専門性が高く単身で登録できて 里親手当が日本の約４倍	専門家として扱われないため子ども 情報が制限されている

一方で里親の悩みは同様　里親は仕事なのか？　誇りと自負、喪失感など

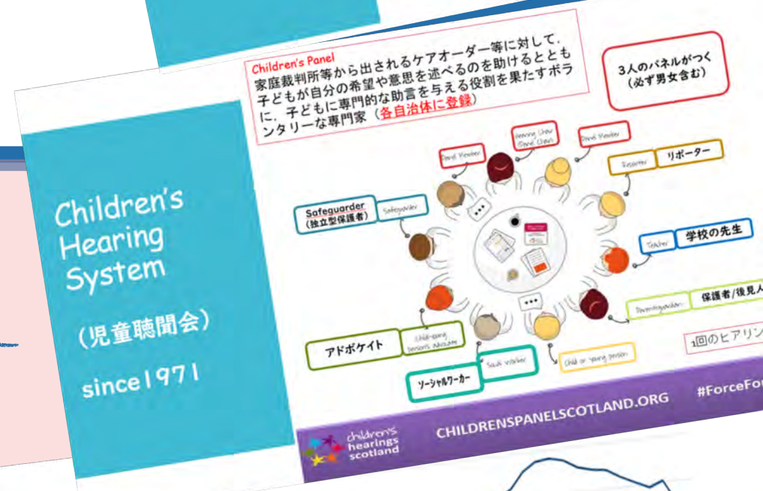


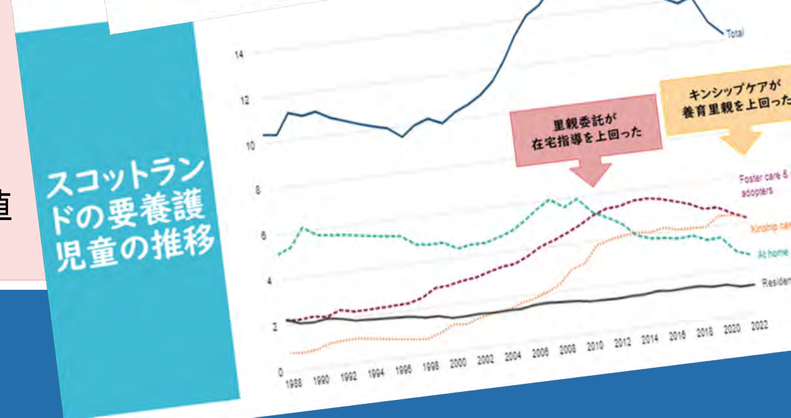
特に

- 本当の意味での子ども中心
- 親族・近所・先生などの里親
- 里親の地位・手当の差
- 実親との関係

やらなければ・できること

- 実子研修
- 専門性
- 里親地位向上
- 実家庭再構築目標値



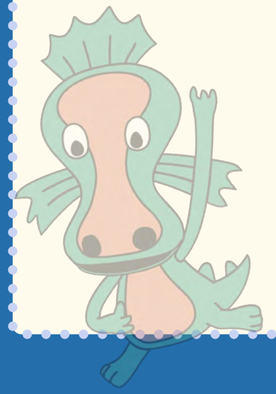


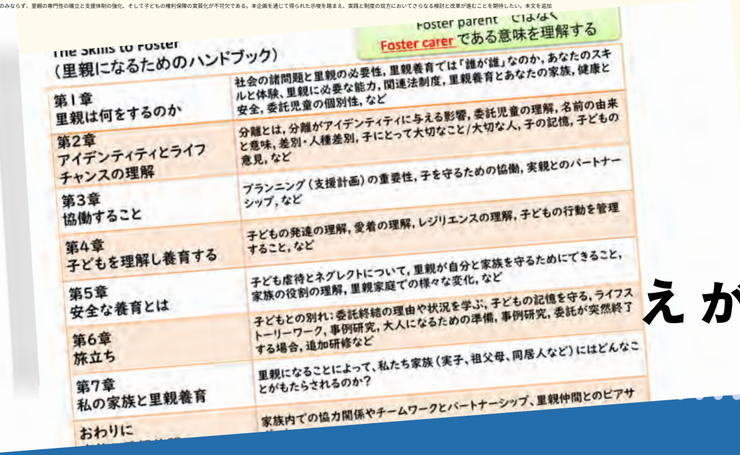
事業１　セミナー　コメント

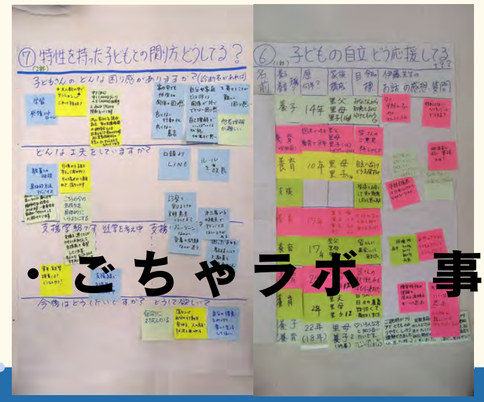
伊藤嘉余子　　公立大学教授

本企画「こんなに違う里親制度」は、イギリスと日本の里親制度や里親支援の違いを通して、日本の社会的養護のあり方を問い直す貴重な機会となった。とりわけ印象的であったのは、イギリスにおいて里親が単なる「ボランティア」としてではなく、「重要な社会的養護の担い手」として位置づけられ、継続的な研修やチーム支援のもとで実践が支えられるとともに、経済的な支援も充実している点である。これに対して日本では、里親手当の増額、里親研修の充実等、里親支援体制が改善されつつあるといえるものの、依然として「里親の善意」に依拠する傾向があり、支援体制や役割認識において大きな差異が見られる。

また、子どもの権利の位置づけにも重要な違いがある。イギリスでは、子どもの意見表明や参加が制度的に担保され、措置プロセスに「子どもの意向聴取」が組み込まれているのに対し、日本ではその実質化が課題として残されている。また、里親家庭の実子向けの研修がある点も特筆すべきイギリスの特徴である。こうした点は、単なる制度の違いにとどまらず、「子どもをどのような主体として捉えるか」という根本的な価値観の差を示しているといえる。







えがお・ごちゃラボ　事業①

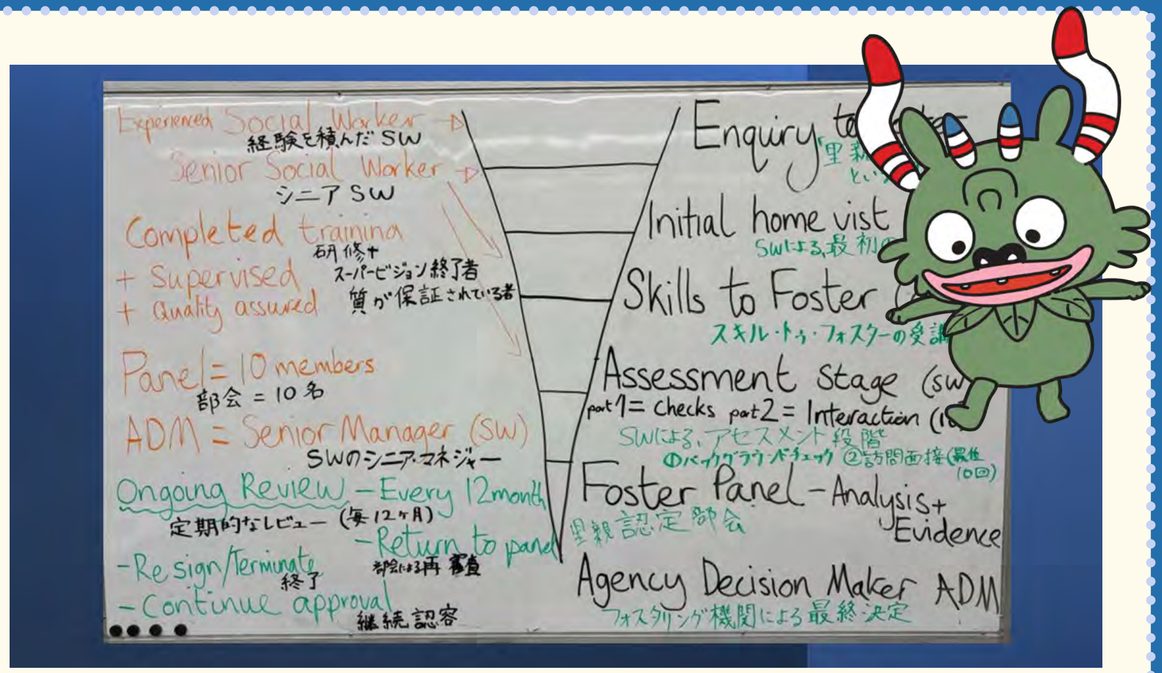
©TPC ©KSW

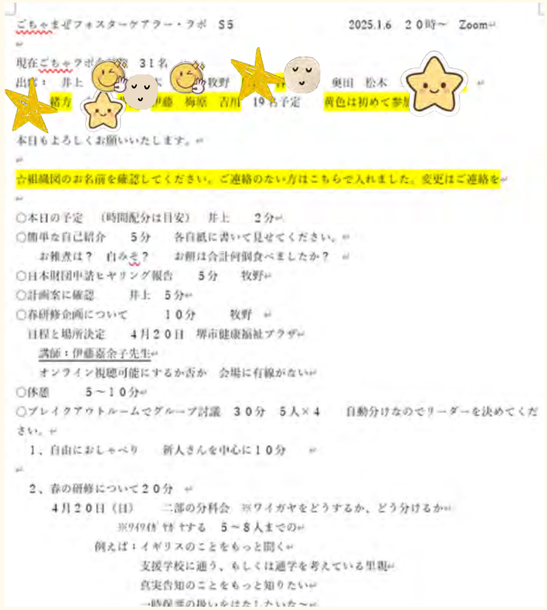
事業２

調査研究・技術開発

月１回　オンラインMTG
２４年８月から２０回
会員は４５名に増えました。

通りすがりにちょっと寄るように、毎回顔ぶれのちがうメンバーが集まり、持ち込まれる面白いこと、困っていること、やりたいこと、言いたいことを、文字通りごちゃまぜして出来上がる不思議な、でも確かに魅力あるものが生み出され、着実に前に進められる空間になりました。
メンバーが増えたので班分けのアイデアも出てきました。えがおHP内に特設コーナー計画中




ごちゃまぜフォスターケアラー・クボ　S5　　2025.1.6　２０時～　Zoom

現在ごちゃクボ78　３１名

出席：　井上　　牧野　　奥田　松本

諸方　伊藤　梅原　吉川　19名予定　黄色は初めて参加

本日もよろしくお願いいたします。

☆組織図のお名前を確認してください。ご連絡のない方はこちらで入れました。変更はご連絡を

○本日の予定　（時間配分は目安）　井上　２分

○簡単な自己紹介　５分　各自紙に書いて見せてください。

お雑煮は？　白みそ？　お餅は合計何個食べましたか？

○日本財団申請ヒヤリング報告　５分　牧野

○計画案に確認　井上　５分

○春研修企画について　１０分　牧野

日程と場所決定　４月２０日　堺市健康福祉プラザ

講師：伊藤嘉余子先生

オンライン視聴可能にするか否か　会場に有線がない

○休憩　５～１０分

○ブレイクアウトルームでグループ討議　３０分　５人×４　自動分けなのでリーダーを決めてください。

１、自由におしゃべり　新人さんを中心に１０分

２、春の研修について２０分

４月２０日（日）　二部の分科会　※ワイガヤをどうするか、どう分けるか

※ワイガヤをする　５～８人までの

例えば：イギリスのことをもっと聞く

支援学校に通う、もしくは通学を考えている里親

真実告知のことをもっと知りたい

一時保護の扱いをはたらいたな～

クイズ：イギリス里親制度

©TPC ©KSW

事業２
月１回　MTG

コメント

荒屋　昌弘　　大阪人間科学大学　講師

「ごちゃまぜフォスターケアラーラボ（以下、ごちゃラボ）」は、養育・専門・養子縁組の各里親をはじめ、支援者、学識経験者、家庭養育に関心を持つ市民など、立場や地域の垣根を越えて集う「混成グループ」です。「ラボ（実験室）」という名称が示す通り、既存の相談会や研修会の枠組みに捉われない柔軟な活動形態と、より良いものを目指す好奇心による実験的なトライ＆エラーこそが魅力であり、最大の特徴となっています。
日々の困りごとの共有から、情報の集約、さらには具体的な研修プログラムの企画立案までが、横断的かつ有機的に連なっています。そのプロセスの中で、子どもと大人の双方にとって「より良い家庭養育」を追求する好奇心が刺激されます。そこで生まれたアイデアが形となり発信されることで、参加するメンバーは自身が社会に働きかけているという確かな存在価値を実感することができます。これは、従来の里親会とも支援者の連絡会とも異なる、他にはないユニークな活動の姿だと言えるでしょう。
「ごちゃラボ」の活動の源泉は、里親・養親・支援者・研究者といった「子どもに関わる大人たち」が抱える切実な苦悩や願い、そしてより良い家庭養育への熱意と希望にあります。当ラボが掲げる目標は多岐にわたりますが、単なる目的遂行型の組織に留まらず、対話を重ねるプロセスそのものが「参加者の孤独感の解消」や「自己肯定感の向上」を促すプラットフォームとして機能しています。この心理的安全性が確保された場での対話が、既存の概念に縛られない新しい視点やアイデアを創出する貴重な機会となっているのです。
「里親制度の教科書掲載」「イギリスの里親会との交流」「実子対象研修の実現」――これらはどれも、かつては周囲の関心も薄く、たとえ思い描いたとしても「無謀な目標」として、希望の芽を摘まれてしまうようなものでした。しかし、自身や仲間の苦悩から生まれる「何かを成さねばならない」という切迫感や衝動は、やがて大きなうねりとなります。それが具体的な形として表現されたとき、想いは伝染するように波及し、さらなるうねりを生み出しながら、新しい運動へと結実していきます。この1年間、「ごちゃラボ」はこのような運動を続けてきました。「ごちゃラボ」のあり方自体が、困難を抱えながらも家庭養育を中心とするこれからの社会的養護のあり方の1つの形を示しているのだと思います。
私たちは、新しい里親養育のあり方を模索し、子どもの人権が真に尊重される社会の実現に向け、その確かな手応えと社会的責任を共有しながら、これからも活動を継続していきたいと考えています。

えがお・ごちゃラボ

©TPC ©KSW

事業３
里親家庭実子向けプログラム

２０２５年7月１７日　門真市民プラザ
デモンストレーション 8名
２０２５年7月２０日　茨木市　おにクル　８名
２０２６年1月２４日　名古屋市　４名

- 多くの子どもがプログラム前は不安を抱えていたが、終了後には「よかった」と前向きに感じている。
- 意見を自由に言える仕組みや、シール・付箋などの工夫が特に好評。
- 自由記述では「里子を大切にしたい」「家庭でしかできないことを伝えたい」という前向きな考えが多く見られた。
- 改善点として「事前説明をもっとしてほしい」「少人数であることを伝えてほしい」との意見が挙がった。

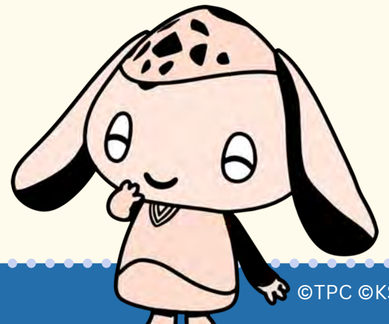
アドボカシー的視点まとめ

- プログラムを通じて「自分の気持ちを伝えられる」「里子を受け入れる気持ちが高まる」という前向きな変化が確認された。
- 「自分の気持ちや存在を大切に思う」という軸はもともと高かったが、研修によって再確認された。

©TPC ©KSW

事業３　実子向けプログラム記録動画

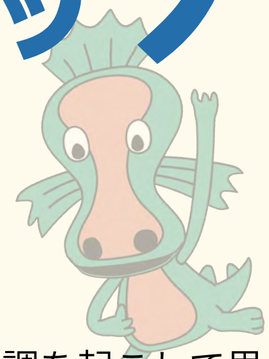
２０２６年7月２３日（水）大阪府茨木　おにク
～勇気ある６名の子どもたちと先輩実子たち～



©TPC ©KSW

事業３
実子向けプログラム

ファシリテーター・スタッフ



インタビュー形式によるコメント

ファシリ：井上直美　（養子縁組里親）　　牧野博子　（養子縁組　養育里親）

１，実子研修に関わることになったきっかけと、その中で感じていた課題意識を教えてください。

2024年夏のStFトレーナー養成講座の中で実子研修が入っていることに驚きを覚えました。実際、里親仲間で実子が不調を起こして里親をやめていったり、家庭が壊れて困っているのを見聞きしていたので、私たちに出来る事はこれだ！と強く思いました。井上

イギリスの現状を聞き、『子ども真ん中』という事はこういうことだと感じ、これは日本の大きな遅れとも感じました。そして取り組むべき大きな課題だと確信しました。牧野

２，研修の中で見えてきた、実子の反応や変化にはどのようなものがありましたか。印象的なエピソードがあれば教えてください。

私たちが考えるよりも実子さんは里子の事を凄く考えていることを感じました。研修の中で、虐待を受けていた子どもの里親家庭になり、2年経って養子に行くことになった里子ちゃんの事を、お別れの時に「また虐待されないかな」と考えていた実子さんが居て、実子も社会的養護の大切な担い手であることを実感しました。そして、嫌な時は嫌と言っても良いんだよ、しんどくなる前に家族で相談して良い方法を探しましょう、と話した時の子どもの表情は「言っても良いんだ」という安堵の表情でした。井上

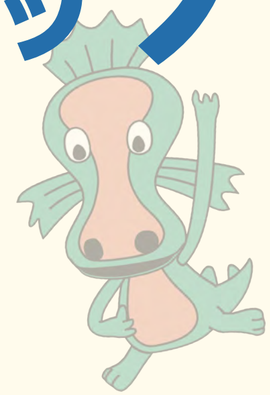
子どもたちの中にある、どうしても正解を求めてしまう、間違ったらどうしよう、意見があるのに出せない、という日本独特ともいえる抵抗感からプログラムはスムーズになりにくかったです。間違う権利や意見表出の権利という子どもの権利アドボカシーを私たちもしっかり学び、伝えていかなければならないと思います。牧野

えがお・ごちゃラボ

©TPC ©KSW

事業３
実子向けプログラム

ファシリテーター・スタッフ



インタビュー形式によるコメント

ファシリ：井上直美　（養子縁組里親）　　牧野博子　（養子縁組　養育里親）

実子向けプログラム当日スケジュール

３．ご自身のこれまでの経験と重なると感じた点や、「当時こういう場があればよかった」と感じたことはありますか。

我が家の初めての一時保護委託時に、息子や旦那に事前に相談はしていたように思うが、大切なことだという意識が少なくて
その時このプログラムがあれば、迎える時の心構えと家族の計画が相談したり立てられたと思う。牧野
今回お手伝いして下さった成人した実子さんが「自分が思春期の頃にこの研修受けたかったな…」
と話されていたことが、この研修をやってよかったと思えた一番の出来事でした。　井上

えがお・ごちゃラボ

©TPC ©KSW

事業３
実子向けプログラム

ファシリテーター・スタッフ

インタビュー形式によるコメント

ファシリ：井上直美　（養子縁組里親）　　牧野博子　（養子縁組　養育里親）

４，実子に対する事前の説明や研修は、どのような点で必要だと感じますか。

親が里親を始める時に話しているとは思いますが、経験していないことを想像するのは子どもにとっては難しいと思います。親が良い事をやっていると思えば思うほど、自分が不安になったり寂しくなったりした時に「嫌だ！」と自分の気持ちを出せないのはアドボカシーにも反しますし、そこを初めに解決しておかないと家庭内の不和にも繋がると思っています。井上

『家庭養育』とはうたわれていますが、その時点で里親家庭での実子やその他同居家族も里親家庭養育の一員だという大切な要素を里親もその周辺もしっかり意識しなければ、養育活動の妨げになり最悪の場合元々の家族が崩壊する心配がある。牧野

５，今後、日本の里親制度の中で、実子支援としてどのような取り組みが必要だと考えますか。

やはり、実子も大切な社会的養護の担い手と位置付ける必要があると思います。その為には里親支援の包括的なチーム作りを行い、里親登録の最初の段階から実子にも研修を行い、随伴者ではなく一人の支援者としての位置づけが必要だと思います。井上

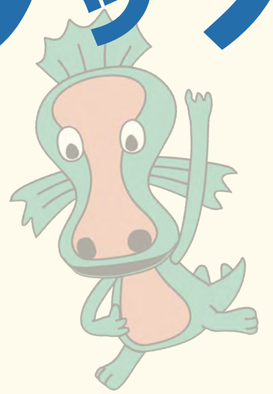
実子研修という概念を広くお伝えするところから始めることが重要と思います。里親も研究者であっても、私自身もイギリスの登録前研修に出会って、その中に里親家庭の実子（いとこや近所の子どもも参加可能）への研修があることを知るまで、知ってからも、里親家庭の実子に対しての研修をすることにはすぐに受け入れられないような抵抗感がありました。けれど実際に行ってみると、その必要性を強く感じますし、参加者も間違いなく感じておられ、声もお聞きしました。まずはそこからですね。牧野

えがお・ごちゃラボ

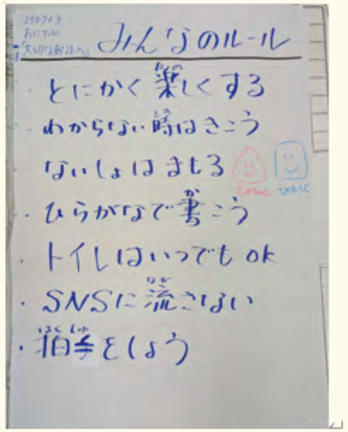
©TPC ©KSW

事業３
実子向けプログラム

ファシリテーター・スタッフ



ルール・模造紙に付箋を貼る取り組み等



緒方笑子　　スタッフ　養育里親

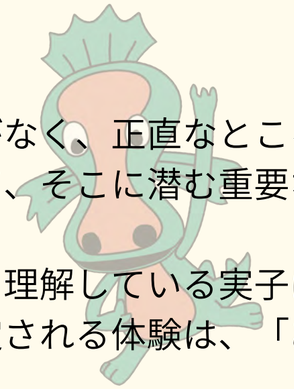
日本で初めての実子研修は、スタッフとして携わりながらも、その意味や意義をはっきりと見出すことが出来ずに始まりました。が、実際は、実子との関係不調でうまく進まないという報告があることも知っていました。当日、緊張した面持ちの子どもたちと共に始まった研修は、付箋を一枚、また一枚と貼り付けるたびに、心の扉も一つ一つ開かれ沢山の想いが模造紙の上に踊りだし、どんな気持ちも出していいという解放感が笑顔となって溢れました。その一方で、実子として経験をしてきたサポート役のリーダー達は、「自分たちが子供だった時にこんな機会があれば良かった・・・」と羨ましい視線を投げかけていました。私たちは、日本のこれまでの里親制度における「実子」が、おざなりになっていたことを目の当たりにしたと同時に、何歳になっても「あなたは大切な子どもだ」「あなたはあなたの声をあげることができる」と伝え続ける使命があるのではないかと考えています。研修の内容や対象者も精査し、新たなオリジナル研修を作る声も上がっています。多方面からの問い合わせもあり、今後行政委託に繋げられるよう邁進していきたいと思います。

えがお・ごちゃラボ

©TPC ©KSW

事業３　実子向けプログラム

コメント



荒屋昌弘　大阪人間科学大学　講師

「言葉にされなければ、目の前にある存在に気づくことはできない」――。私自身、当初は「実子研修」という概念に馴染みがなく、正直なところ違和感すら抱いていました。しかし、実際にプログラムの取り組みを目の当たりにし、実子の声が可視化されるプロセスを経て、そこに潜む重要な課題と大きな可能性を強く実感しました。

このプログラムの核心は、参加者である実子の気持ちや意見を尊重する姿勢にあります。里親である親の活動を「良いこと」と理解している実子は、往々にして自分のニーズを後回しにしがちです。しかし、「あなたはどう思う？」という問いかけを通じて自分の声が全肯定される体験は、「あなたの存在そのものが大切である」という本質的なメッセージとして彼らに届きます。

さらに、実子の視点は、より良い里親養育を実現するために不可欠だと思うエピソードがありました。プログラムの中で、養子縁組が決まった里子に対する気持ちを話し合う中で、ある実子の「また虐待されるのではないか心配」という言葉は、大人が制度や手続きの中で無意識に打ち消してしまう「真実」を突いていました。

実子の言葉に耳を傾け、彼らが見ている景色を尊重することは、結果として里子のウェルビーイングを守ることにも直結します。子どもたちの純粋な視点こそが、里親養育における「見えない課題」を解き明かす鍵となると思うのです。

谷　俊英　　大阪大谷大学　准教授

里親家庭における実子は、里子と同様に権利主体であり、その最善の利益が保障されるべき存在である。そのため、里親は実子と里子双方の権利を保障する必要がある。そして、両者の関係性は相互に発達的意義を有しており、里親家庭という枠組みで捉えた場合、それぞれが一つのチームを構成する成員として位置づけられる。

しかしながら、現状の里親支援においては、「実子」に着目した支援は十分に行われているとは言い難い。そこで本事業は、里親家庭における実子に焦点を当てたプログラムとして実施した。本プログラムを通じて、実子が「子どもの権利」を理解するとともに、自身も権利主体であることを認識し、里親制度に関する正しい理解を深める機会となった。その結果、実子が里親家庭における自身の役割を理解する一助となったと考える。

このように、実子における権利および里親制度への理解が促進されることで、実子が里親や支援者に対して自らの意見や思いを表明することが可能となり、里親養育における不調の予防につながる効果が期待される。さらに、支援者側にとっても、「里親支援」にとどまらず、「里親家庭支援」という視点のもと、里子・実子・里親を包括的に捉えた支援体制の構築を促進し、安定した里親養育の実現に資するプログラムであるといえる。

えがお・ごちゃラボ

©TPC ©KSW

事業４
イギリス里親会との交流

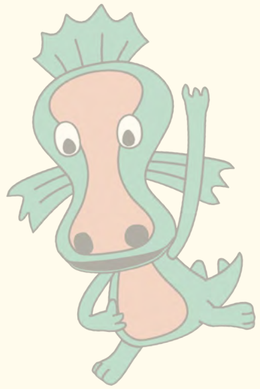
何度か　交流企画の日程を提案しましたが、かみ合わず、２０２５年度は断念いたしました。２０２６年の早い段階で、里親同士の交流で互いの国での制度や取り組みを伝え合いや違いや取り組みたい要素を見つける。そして２６年度中に子ども絵画での交流を図りたい。

牧野博子

©TPC ©KSW

事業４　イギリスの里親会との交流

コメント



　残念なことに、イギリスの里親会さんとの交流事業は実現できなかった。
２つ原因が考えられる。１つは当法人の団体説明に苦慮したこと。２つ目はやり取りしたアドレスが問題あったのかセキュリティのためか、メールが互いに受け取れなかったためだと思われる。１つ目の団体自身のことだが、『里親子支援機関』と法人名に支援機関があるため、『えがお』はフォスタリング機関だと勘違いされた。支援機機関が里親会との交流を所望しているかのようにとらわれてしまった。実際には当法人が里親会そのものであることを伝えきるのに外国であることもあり時間がかかり過ぎた。実際海外ではこのように児相に切り離された里親会はあるのか、別のレベルで調べたくなった。
　計画としては、第一段階として、大人（里親）レベル交流をしたうえで、子ども同士は絵画での交流をやっていきたいと思っている。

えがお・ごちゃラボ

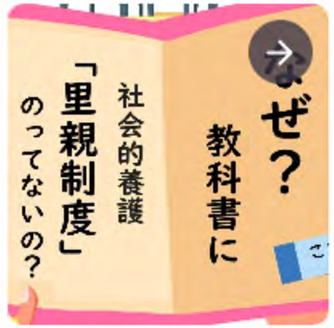
©TPC ©KSW

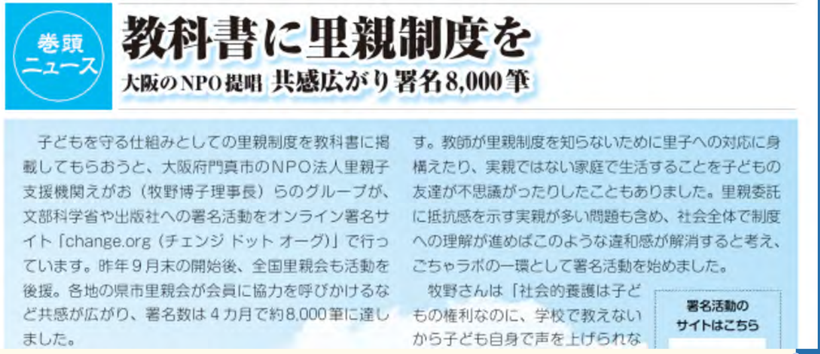
事業５
教科書署名運動

もし、あなたの友達の子どもが突然、親と暮らせなくなったら――
子どもを守る社会的養護「里親制度」を教科書に！知らないこ...

現在、日本では約４５，０００人の子どもたちが家族と暮らせず社会的養護のもとで生活しています。その理由は虐待やネグレクトだけでなく、事故や病気で突然親を失うなど、子ども自身に責...

5件の賛同　日本 ・ 2025年9月30日に開始





巻頭ニュース

教科書に里親制度を

大阪のNPO提唱 共感広がり署名8,000筆

子どもを守る仕組みとしての里親制度を教科書に掲載してもらおうと、大阪府門真市のNPO法人里親子支援機関えがお（牧野博子理事長）らのグループが、文部科学省や出版社への署名活動をオンライン署名サイト「change.org（チェンジ ドット オーグ）」で行っています。昨年９月末の開始後、全国里親会も活動を後援。各地の県市里親会が会員に協力を呼びかけるなど共感が広がり、署名数は４カ月で約8,000筆に達しました。

す。教師が里親制度を知らないために里子への対応に身構えたり、実親ではない家庭で生活することを子どもの友達が不思議がったりしたこともありました。里親委託に抵抗感を示す実親が多い問題も含め、社会全体で制度への理解が進めばこのような違和感が解消すると考え、ごちゃラボの一環として署名活動を始めました。

牧野さんは「社会的養護は子どもの権利なのに、学校で教えないから子ども自身で声を上げられな

署名活動のサイトはこちら

主なものを抜粋

９月３０日オンライン署名公開
１０月１２日全国里親全国大会　会長会で紹介、参加者配布、５００枚チラシ
〃 えがお絵画コンクール表彰式用　１００枚
１０月１９日　大阪市里親会シンポ　１００枚
１０月２９日届福岡市里親会　１０００枚チラシ
〃 高知県里親会　１００枚チラシ
〃 熊本県里親会　１００枚チラシ
〃 （大阪市里親会・天理教里親会）　１５００枚
〃 えがお事務所 ３００枚チラシ（絵画展示会場用など）
１１月４日 大阪府社会協議会　　１５０部チラシ
１１月８日届 鳥取県境港市　１００枚チラシ
〃 えがお事務所 ４００枚チラシ ポスター１０枚　（JaSPCAN用）
１１月１５・１６日　JaSPCAN ３００枚チラシ
１１月２１日 大阪弁護士会 ３０枚チラシ
１２月 全国里親会　後援名義　承諾
１月 FCP参加者用 １０枚

１月 FCP参加者用 １０枚
大阪府要望書提出時　１０枚
１月３１日 全里会長会議
２月１日 奈良王寺里親シンポ ３０枚
２月３日 豊中里親シンポ １５０枚
２月１４日 弁護士会人権フェスタ １５０枚
２月１８日 大阪府施設部会 １００部
３月１日 大阪府特別養子シンポ １００部
３月　東京都中野区里親会　３０部
３月１７日 大阪府施設部会 １００部
３月２２日 大阪府 大阪市 堺市 春季里親研修会 ５０部
３月３１日 大阪府共同募金交付式 ６０部

©TPC ©KSW

事業５　教科書署名運動

コメント

目的は、教育の中で**社会的養護と里親制度**を正しく学ぶ機会をつくり、
・子どもたちへの偏見を減らすこと
・いざという時に子どもを守る選択肢を広げること
・里親家庭やケアリーバーへの理解を深めること
・学校現場への理解を広め当該のこども養育の充実を図る
以上４点の実現。

目標　５０，０００筆

社会的養護下の子ども数を
上回りたいから

谷　俊英　　大阪大谷大学　准教授

2016年の児童福祉法改正においては、「家庭養育優先の原則」の理念のもと、施設養護から家庭養護への転換が示された。この転換の中心に位置づけられているのが里親制度であり、その充実および拡充が求められている。しかしながら、現状では里親制度の社会的認知は十分とは言い難く、制度の発展に向けては、社会全体における認知および理解の促進が課題となっている。

本事業における「教科書署名運動」は、里親制度に関する認知向上の機会として機能し、ソーシャルアクションとしての効果も期待される取り組みである。また、同改正ではこどもが権利主体であることが明記されており、教科書に社会的養護や里親制度が掲載されることで、こども自身が社会的養育の仕組みを学ぶ機会の創出につながる。その結果、こども自身が権利主体であることを理解するとともに、自身の権利として、里親制度を含む社会的養護サービスを選択する可能性が高まる。

さらに、教育現場において社会的養護を扱うことは、こどもに身近な存在である教員の理解促進にも寄与するものであり、こどもの最善の利益を踏まえた支援の充実につながる可能性がある。

以上より、本事業は、こどもを中心に据えた社会の形成に寄与する意義深い活動であるといえる。

えがお・ごちゃラボ

©TPC ©KSW

関連その他

JaSPCAN　学術集会

公募シンポジウム＆パネル展示

２０２５年１１月１５日～１６日　札幌

里親2名　里親支援機関職員１名　研究者２名

公開シンポジウムで実子向けプログラムと教科書掲載運動を発表

パネル展示で教科書掲載運動をアピール

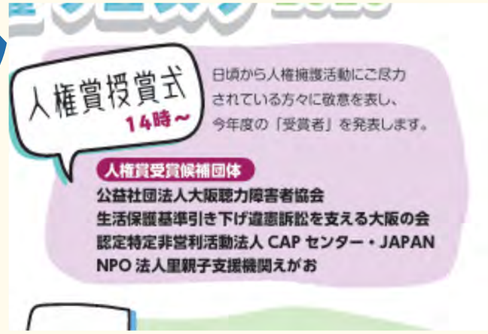
荒屋　高橋　谷　友野　牧野

大阪弁護士会人権フェスタ

人権賞最終候補

２０２６年２月１４日　大阪弁護士会館

実子向けプログラムと教科書掲載運動



©TPC ©KSW

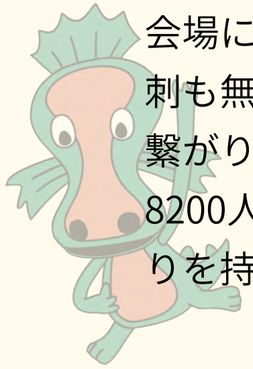
その他関連活動

感想コメント

友野裕美　　専門里親

子どもたちの笑顔を絶やさないために、知ってもらいたい里親制度！この思いを胸に日本子ども虐待防止学会（JaSPCAN）に行ってまいりました。

会場にたくさんのパネルが並んでいるその一画に、里親制度教科書掲載ポスターを貼り出し、同チラシやえがおのパンフレット、そして私たち里親の名刺も置きました。JaSPCANは全国から参加者が集まり、会場には人があふれていました。でも、その中で里親は私たちを含め20人いたかどうかわかりません。児童虐待防止学会なのに…里親も子どもたちをそばで支えている者なのに…でも、だからこそ、ここで発表する意義があったのです。「里親から広がる子どもの権利とえがお」と題して、里親子支援機関えがおの取り組や実子向けプログラムなどを伝えました。「里親制度教科書掲載運動」については次のように発表しました。「里親制度が社会的認知されることにより、里親家庭が当たり前の存在として受け入れられ、里親が子育て支援の一環として広められ、子ども自身が自らを権利の主体として意識し里親制度を一つの選択肢として捉えるようになる可能性が生まれる」会場にはたくさんの方々が私たちの話に耳を傾けてくださり、質問も飛び交いました。帰るころには、チラシは残り少なく、名刺も無くなりました。そして、JaSPCAN終了後、どんどんと署名数が増えていったのです！　また、ここで交わした名刺は今も繋がりを持ち、えがおの働きが広がりつつあります。署名運動は8200筆を超えました。5万筆にはまだまだ足りません。でも、8200人の方が里親制度の大切さを知って賛同してくださったのです！　私は一人の小さな里親ですが、一歩踏み出すこと、繋がりを持つことは、大きな目標に近づいていくと感じたJaSPCANでした。



えがお・ごちゃラボ

©TPC ©KSW

ラボのまとめ

1 総括と制度改善に向けた提言

本ラボの取り組みでは、イギリスの里親制度の理解および日本との比較、さらに里親や実子の実体験を通して、日本の里親制度における課題を明らかにした。その結果、日本においては、里親制度が社会的養護の一環として位置づけられているにもかかわらず、支援体制および制度運用の面において複数の課題が存在することが確認された。

特に、里親への情報提供の不足、養子縁組後の支援の断絶、家庭再統合に向けた支援の不十分さに加え、里親家庭の実子に対する支援の欠如が顕著であった。また、里親に求められる専門性についての理解が十分に浸透しておらず、里親と支援機関が協働して養育を行う体制の強化が求められる。

これらの課題に対し、本ラボでは、実子を含めた家族単位での支援の導入、情報開示および研修体制の強化、養子縁組後を含めた継続的支援と家庭再統合支援の整備を提言したい。さらに、里親の実践知を整理し「教科書の社会的養護・里親制度を掲載」を求めることで、認知度を高めるとともに、里親の専門性の向上と制度全体の質の底上げを図る必要がある。

えがお・ごちゃラボ

ス

©TPC ©KSW

ラボのまとめ

2 まとめと今後の方向性

本ラボの取り組みから、日本では支援の継続性や情報共有の不足、実子支援の欠如などが依然として課題であることが明らかとなった。また、登録里親に占める親族里親の割合は約5％程度にとどまっており、養育形態の多様性の活用という点においても改善の余地がある。

今後の活動

・日本版実子プログラム（特に登録後）の構築
・イギリス里親会との子どもを含めた交流
・教科書掲載運動の継続
・里親の専門性を高めるためのラボ活動（MTG）を活発化させる

えがお・ごちゃラボ

©TPC ©KSW

ラボのまとめ

3 日本の里親制度への今後の方向性

今後は、里親・里子のみならず、実子を含めた家族全体を支援の対象として捉えた包括的な支援体制の構築が不可欠である。特に、実子に対しては事前の理解促進と継続的なフォローを行う仕組みを整備することが求められる。実子が安心して生活できる環境を整えることは、里子の安定した養育にもつながる重要な要素である。

また、里親は社会的養護を担う存在として一定の専門性が求められることから、継続的な学習と実践を支える仕組みの整備が必要である。里親と支援機関が協働しながら専門性を高めていく体制の構築が求められる。

さらに、里親の実践知や経験を整理・共有し、体系化する取り組みは、知見の継承と支援の質の向上に資するものである。今後は、こうした知見の蓄積と活用を通じて、制度と実践が連動しながら発展していくことが期待される。

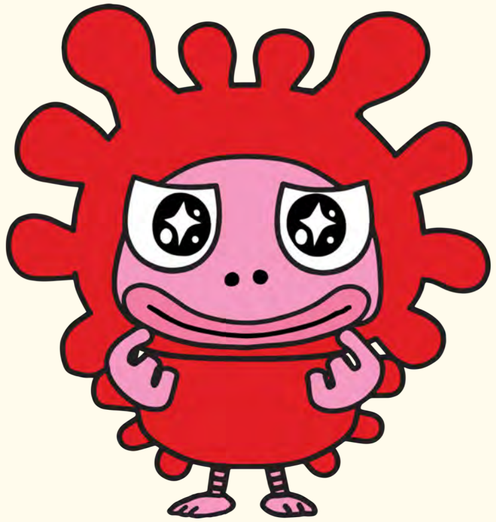
えがお・ごちゃラボ

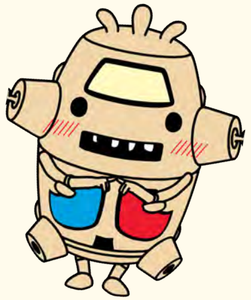
©TPC ©KSW

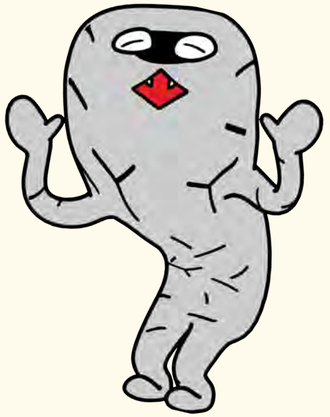
ありがとうございました！

目指そう　社会的養護　里親制度の社会化

NPO法人里親子支援機関えがお　ごちゃまぜフォスターケアラー・ラボ







2026年4月

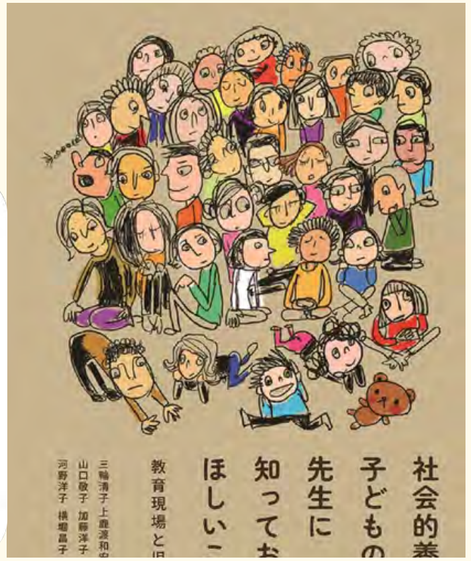
©TPC ©KSW

参考文献・資料

1 フォスタリングネットワーク編
『スキルス・トゥ・フォスター』明石書店

2 全国アドボカシー協議会ホームページ
『子どもアドボカシーの手引き』

3三輪清子他『社会的養護の子どもたちのために、
先生に知っておいてほしいこと。』理工図書



©TPC ©KSW